

特集：広がる読書支援

図書館多読支援の広がり

— 『図書館多読のすすめかた』 出版に際して —

酒井 邦秀

外国語を身につける道として、多読はとても変わったやり方です。語学学習の常識はほとんど全部ひっくり返します。英語の授業に背を向けて、正反対の方向に進んでいきます。

とても「非常識」な方法なのに、2002年の発表以来たくさんの人に歓迎されて、2012年には日本語多読研究会と手を組んで、NPO多言語多読として英語多読の活動が始まりました。同NPOの三つの柱の一つは「図書館多読の普及」です。東海地方と東京を中心に、西は鳥取県、岡山県から東は岩手県まで、各地に広がってきました。

この記事では図書館による多読支援について三つの点をお話します。第一に ①多読ってなに？ という簡単な説明、次いで ②図書館は最善の「場」、そして最後に ③図書館の多読支援の実例 です。

① 多読ってなに？

ひとことと言えば読書です！

あまりに常識とかけ離れているので説明が少し長くなります。たとえば暗記や問題集や反復練習などは「英語学習」の常識ですが、多読ではわたしたちがおもしろいと感じられない作業は全部ひくくめて、やりません。試験もありません。和訳もありません。毎日のノルマなどはもってのほか、好きなときに好きなだけ楽しめます。ひとことと言えば、多読は読書なのです。勉強や学習ではなくて。

読書が好きな人は現代国語の点数がよいとよく言われますね。読書がことばを育てるのは英語も日本語も同じです。英語の読書が英語力を大きく育てるのは当たり前といっているでしょう。でも、これまでの英語の授業や学習では、なかなか読書

には到達しなかったのですね。

原因の一つは読む英文がむずかしすぎたことです。正確さを追求したことも大きな原因です。なにより「楽しさ」を求めなかった！ 一人一人が頭や心を楽しませるためにする読書と考えると、NPO多言語多読が提唱する「非常識な多読三原則」もすぐに納得できるはずです。

辞書は捨てる。

わからないところは飛ばす。

合わない本は投げる。

読書ですから、そもそも辞書は捨てます。(分からない単語を全部辞書に当たっていたら読書ではありませんね。) それに入門用で好評なOxford Reading Treeというシリーズは最初の10数冊が文字のない絵本ですから、単語の知識はいりません。次の10数冊はシリーズの登場人物の紹介で、文字はほぼ名前だけです。その次の段階でやっと1ページに3語とか4語の文が出てきますが、絵と文の役割をよく考えて作られているので、単語の知識はほとんどいらないでしょう。

とはいえ、分からない単語が出てきたらどうするか？ その単語は見なかったことにして先へ行きます。(多読三原則の1) ところがよくあるこ



最初はこのくらいから Oxford Reading Tree シリーズ